

- 三三三頁、二二六頁、一一五頁、山里、前掲書、一九六七〇年、一九頁、二〇頁。
- 14 神嶋人民党史編集刊行委員会「神嶋人民党史」(日本共産党神嶋県委員会、一九八五年)、二五六―二五七頁。
- 15 山里、前掲書、一九六七〇年、二〇―二二頁、二二頁、三六頁。
- 16 大城俊男「神嶋の学生運動」(『現代の眼』、一九六九年五月号)、一一八頁。琉球大学二十周年記念誌編集委員会「琉球大学二十周年記念誌」(琉球大学、一九七〇年)八〇頁。また、修正資本主義路線をとる自由主義学生同盟(自学同)もこの時期誕生した。
- 17 立花隆「中核vs革マル(上)」(講談社、一九八三年)九一頁。松村良一「革命的共産主義者同盟(全国委員会)」、戦後革命運動事典編集委員会編、前掲書、一九八五年、五二頁。
- 18 黒田寛二編著「日本の反スターリン主義運動?」(こぶし書房、一九六八年)、二八―二九頁。久高、前掲論文、一九七八年、九四頁。
- 19 徳坂、前掲論文、一九六九年、一七一頁。
- 20 大城、前掲論文、一九六九年、一一八頁。徳坂、前掲論文、一九六九年、一六七頁。
- 21 例えば、一九六九年一月二三日全県民統一行動の後、

- 復帰協は一七〇日統一行動への革マル派等の新左翼団体の参加を認めなかった。与那国連「神嶋・反戦平和意識の形成」(新泉社、二〇〇五年)、一四二―一四三頁。
- 22 藤田計成「新左翼運動全史」(渡動出版、一九七八年)二六九―二七三頁。
- 23 黒田、前掲書、一九六八年、一二九頁。
- 24 例えば、不二無生「七〇年安保と神嶋闘争の教訓」(日本革命的共産主義同盟・革命的マルクス主義派「共産主義者」第一六二号、一九九六年五月)七三頁。
- 25 「六〇年代・七〇年代を検証する―全共闘の時代、神嶋は燃えていた/知念善二氏(元神嶋委員長)に聞く」、『図書新聞』二九〇七号、二〇〇九年二月二八日。

ドキュメンタリー作家 上原正稔の挑戦!

琉球新報の言論封殺との戦い

江崎 孝

去る一月二十四日、「バンドラの箱掲載拒否訴訟」の第五回公判が那覇地裁で行われた。この訴訟はドキュメンタリー作家上原正稔氏が、琉球新報の「言論封殺」を訴えるという前代未聞の裁判であるにも関わらず、これを知る県民はほとんどいない。神嶋の二大紙、琉球新報と神嶋タイムスが、自分たちにとって「都合な真実」は、決して報道することはないからである。

■上原氏怒りの記者会見■

ちょうど一年前の一月三十一日、県庁記者会見室で上原正稔氏が記者会見を行った。その日の午前中に、上原氏は琉球新報に対する損害賠償訴訟を那覇地裁に起こし、それを受けての会見であった。代理人の徳永信一弁護士が訴訟の概略を

説明した後、マイクに向かった上原氏は、開口一番神嶋戦時に慶良間島で戦隊長を務めた赤松嘉次、梅沢裕嗣氏に対して「大変な迷惑を掛けた。許してください」と佳びの言葉を述べ、「(戦隊長による)集団自決の命令がなかったことは火を見るより明らかだ」、「真実を伝えるのがマスコミの使命だ」と訴えた。

さらに、記者団に向かい「琉球新報の記者は来ているか」と問いかけた。若手の記者が「はい、来ています」と挙手で答えると、上原氏はその記者に向かって「君たち新聞記者は都合の悪いことは報道しないが、この裁判で君の会社が訴えられたのだよ」と一喝し、「これを明日の記事にしなかったら新聞社の恥だよ」と釘を刺した。気の毒にも、また若い記者は、上原氏の気迫に押されたのか「ハイ」のひと言だけで

返す言葉はなかった。上原氏は、二〇〇九年五月、「うらそえ文藝」(第十四号)で、異論を封殺する琉球新報を激しく糾弾したが、琉球新報は一切これを報道せず黙殺で通したことを琉球新報の記者に皮肉ったわけだ。

徳永井護士によると、裁判の要点はこうだ。

上原氏が琉球新報に長期連載中の沖縄戦記「バンドラの箱を開ける時」を閉く時、慶良間の集団自決問題の真相に触れる部分が、「社の方針に相違する」との理由で掲載日の直前になって突然中断に追い込まれ、大幅な原稿の改変を余儀なくされた。四月月後に執筆を再開したが、最終章の原稿の掲載を拒否され、未完のまま終了した。徳永氏は「琉球新報が、原稿の受け取りを拒否し連載を打ち切ったのは、契約違反である。事実に基づく真相の探求を封じたことは個人の表現の場を一方的に奪ったものであり、公正で不偏不党な報道という社是に背反し編集権を逸脱する」と述べた。裁判の名目は「損害賠償の請求」と、民事訴訟ではよくある原因だが、裁判の根底に大きな争点が隠れている。それは日頃言論の自由を標榜する新聞社としては最も恥ずべき「言論封殺」を琉球新報自らが行ったということだ。そして「言論封殺」の裏には、沖縄戦で長年論議されてきた「集団自決における軍命の有無」が最大の争点として潜んでいることを、原告、被告の両陣営が強く意識していることは言うまでもない。上原氏と

琉球新報に連載していた沖縄戦記「バンドラの箱を開ける時」を深い興味を持って愛読していた。実際の戦記を得意とする上原氏が当時話題沸騰であった集団自決の「軍命論争」に関し、どのように記述するかが関心の的だったからだ。上原氏とは面識はなかったが、従来の沖縄戦の研究者のように、戦争の持つ影の部分のみを捉えて無理やりイデオロギー問題にすり替える手法をとらず、沖縄戦の真実の物語を追及している異色の沖縄戦研究者として関心を持っていた。上原氏が始めた「フットボール運動を取り上げた沖縄テレビ制作」(むかしむかしこの島で)は、第十四回FNSドキュメンタリー大賞ノミネット作品となり、沖縄テレビのサイトでは、上原氏の沖縄戦の記録発掘に対する姿勢がどのようなものかを垣間見ることができた。これも上原氏の連載に興味を持った一因であった。当時私と同じように上原氏の「バンドラの箱を開ける時」の連載に注目している人物がいた。産経新聞那覇支局長をしており、六月十六日のブログに第二話「慶良間で何が起きたか」が二十日から始まり、慶良間の集団自決がテーマになることが書かれていた。そこには「圧力に屈することなく執筆する」という上原氏の決意が記されていた。私が長年関心を持っていた集団自決の軍命論争の核心が愈々上原氏の筆により語られる。と期待に胸が膨らんだのを記憶している。

琉球新報の間に起きた裁判沙汰を振り返ってみる。

■二〇〇七年、沖縄のメディアは集団発狂した■

ここで時間を五年前の二〇〇七年に巻き戻してみよう。その前にこの訴訟の本質を見極めるためには、二つの重要な点を指摘しておく。一つは上原氏の原稿に何が書かれていたかという点と、もう一つ重要な点は、その原稿が掲載拒否された二〇〇七年六月の沖縄の社会的時代背景である。

平成十九年(二〇〇七年)三月、文科省が高校の歴史教科書の検定意見で、沖縄慶良間諸島でおきた集団自決に関し「軍の命令によるもの」という従来の記述を削除しよう求めた。地元二紙は連日、「集団自決」に関する特集を組み検定意見の撤回を求めるキャンペーンを大々的に張った。その年は、九月二十九日に行われた「高校歴史教科書検定意見撤回を要請する県民大会(十一万人集会)」へと狂気のように雪崩れ込んで行った年でもある。新聞が報じる「十一万人集会」の狂気を目の当たりにして、「狂気は個人にあつては稀有なことである。しかし、集団・党派・民族・時代にあつては通例である」というニーチェの言葉が脳裏を過つたことを今でも鮮明に記憶している。

各市民団体、労働団体の抗議声明が連日の紙面を飾る騒然とした状況の中、私はドキュメンタリー作家上原正徳氏が琉

■バンドラの箱は閉じられた■

掲載予定日の六月二十日、上原氏の連載記事は、琉球新報の何処にも掲載されていなかった。通常、何らかの理由で連載記事が予定日に掲載されない場合、掲載紙の方から、休載の理由について断りがあるものだが、紙面には一切何の説明もなかった。突然の休載に愛読者として一抔の不安が胸をよぎった。言論封殺ではないかという不安だ。漫画家の小林よしのり氏が、沖縄の新聞のことを「異論を許さぬ全体主義」だと皮肉っていたことが現実のものとなって目の前に現れたと考えた。琉球新報に電話を入れ、掲載中止の理由を聞いて貰った。だが、最初に対応した琉球新報の記者は、連載が中止になっている事実さえ知らない様子だった。「自分の新聞のことも見ていないのか」と叱責すると、紙面を確認した後、電話は編集部に戻された。その時「上原さん、原稿が間に合わなかったのかな」という記者の独り言が電話口から洩れ聞こえた。上原氏の記事の突然の中止は記者にも知らされず突然休載されたと感じた。その後電話に出た編集部の担当記者も動揺を隠せない様子で「調整中です」を連発するばかりで、納得できる回答は出来なかった。その時のやりとりを、ブログ「狼魔人日記」に「沖縄のマスコミは大政翼賛会か」というタイトルで書き、読者の支持を受けた。翌日のブログには「琉球新報は報道機関としてのプライドをかなり捨て、連

戦中の記事を「削除」するという禁じ手を使ったことになる」と書き「サヨクの方々が常用する『戦前のような言論弾圧』」がメディア主導で今正に沖縄で行われている。」と続けた。この琉球新報による唐突ともいえる「休戦」に対し、私のブログ「猿魔人日記」の読者の反響は、大きなものだった。「琉球新報に抗議します」というタイトルで定期的にエントリーして抗議の意を表した。

■画龍点睛を欠く連載の再開

それから四カ月が経過した十月十六日、「バンドラの箱を開ける時」が突然再開された。十月十九日付のブログで書いたことを引用する。

「十月十六日、・・・沖縄中を巻き込んだ『集団自決』に関する大ファイバーも一段落が着いた。地元二紙の紙面にも一時のような『新証言者登場』といった刺激的な記事も殆ど見なくなった。その静寂の合間をつつように、その日（十六日）の琉球新報に、四カ月の長期にわたって中止されていた『沖縄戦の記録』がソツと再開された。まるで人目をそばかのように、何の予告もなく、（略）」

新報側の突然の連載中止であるにも関わらず、新聞社側からは連載中止の知らせも、四カ月後の突然の再開の知らせも読者に対しては一言の説明もなかった。今後、琉球新報は

「説明責任」で他人を責めることは出来ない。結局、四カ月前に電話で問い合わせた答えの通りの長い「調整中」を、筆者の上原さんの「長い夏休み」としてゴリ押ししたのだから、げに恐ろしきは新聞社の「調整」。これを別の名で言ううと「言論封殺」と呼ぶ。長い「調整」の結果、内容も「調整」されている模様。事前の予告では次は「慶良間で何が起ったか」を明らかにするとしており、集団自決の真実を白日の下にさらすとのことだったが、再開した第二話のタイトルは「軍政府チームは何をしたか」と変更されているではないか。「集団自決」が起きた一九四五年三月下旬の慶良間を飛び越えて、四月以降の沖縄本島の米軍上陸、投降住民の管理の模様を記しており、「慶良間で何が起ったか」については触れていない。（「猿魔人日記」二〇〇七年十月十九日）

り、今回の事態になった」とも噂された。偏向記事で知られる沖縄紙ではあるが、連載中止という非常手段にできるのはよつばどのがあったに違いない。後にわかったことだが、琉球新報が封殺した原稿には、上原氏が慶良間島の現地検証で得た「軍命はなかった」という論考が赤線々に隠されていた。

■「バンドラの箱」は閉じられたまま連載は終わった

上原氏の記事が再開されたとき、琉球新報の言論封殺を感じながらも、上原氏に対して一種の失望を感じた。「上原正悦よ、お前もか」という心境だ。その年二〇〇七年は新聞に登場する識者と言われる人達の「集団自決」についての論評は、例外なく「軍命があった」の大合唱だった。すくなくとも私の知る限り、「軍命」を否定する識者の論文は見たことがなかった。そんな中で「右も左も関係ない」と「豪語」していた上原氏までもが、新聞の言論封殺に平伏したと考えたからだ。一読者の私は、掲載拒否の裏では上原氏と琉球新報との壮絶なバトルが行われていたことを知るよしもなかった。肝心な部分で四ヶ月も休載しておきながら白々しく「長期休載」としか言い訳の出来ない上原氏に、やはり「全体主義の島」では上原氏といえども新聞の論調には迎合せざるを得ないのか、と落胆したのだ。それでも、肝心の「慶良間で何が起きたか」を欠落したままでは画龍点睛を欠くと考え、最

■琉球新報の言論封殺

不自然な休載と同じく不自然な再開だった。琉球新報が上原氏に対して言論封殺を行った、という疑念は確信に変わった。琉球新報が言論封殺した上原氏の記事には、一体、琉球新報を動揺させるとどんな内容が書かれていたのか。突然の連載中止に対しては当然、いろんな憶測が飛び交った。「新聞を中心に展開されている教科書検定運動に水をかけることになる内容になるため」だが、「編集担当者の態度に変化があ

終回までには慶良間の真相が語られるだろう、と強い期待を抱きつつ、二〇〇八年の連載記事の最終回を迎えることになった。

「第十三話 最終章そして人生は続く」と題する最終回は、「慶良間で何が起きたか」には一切触れず、上原氏が始めた「フット運動の経緯について紙面の大半を使っていた。

「バンドラの箱を開ける時」というタイトルからしたら、まさに竜頭蛇尾の最終回であった。「集団自決の真相」を欠落したまま終わるのでは、期待して最後まで読み続けた読者を裏切ったことになる。読者は琉球新報によって「知る権利」を奪われたことになるのだ。連載戦記「バンドラの箱が開くと」は、皮肉にも箱のふたを開じたまま最終回を迎えることになったのだ。

（フリージャーナリスト）